

関西3空港の展望～今後の関西の成長を見据えて～

約3年にわたるコロナ禍を経て、わが国の航空需要は回復の兆しを見せている。こうした状況のなか、関西は、開催まで2年に迫った2025年大阪・関西万博をはじめとする好機を逃さず、国際的な地域間競争を勝ち抜いていかなければならない。今号では、今後のさらなる航空需要の拡大に備えた地元自治体・経済界などの取り組みについて、関西3空港懇談会の動きを中心に紹介する。

航空需要の概況

新型コロナウイルス感染症の流行が落ち着き、社会・経済活動が正常化するのに伴い、わが国でも2022年10月ごろから国際線の旅客数および発着回数が回復の兆しを見せている。2023年春にはコロナの感染症法上の分類変更や水際対策の緩和などが行われたことにより、5月実績において国際線旅客数は、コロナ禍前比57%の水準にまで回復した。

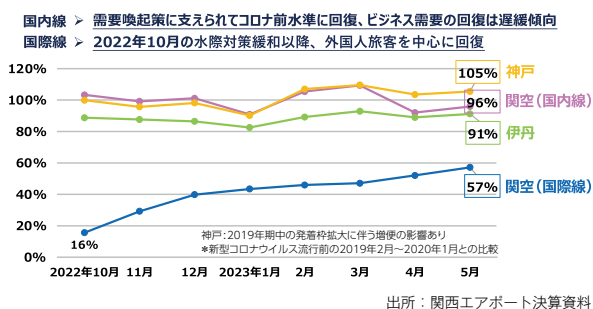
今後も航空需要の伸びは続くと思われる、国際航空運送協会の予測によれば、2024年にはアジア地域の航空需要はコロナ禍前の水準に回復する見込みとなっている。

関西における航空需要の展望

関西に目を向けると、関西3空港の国内線旅客数は、今年5月の段階でおおむねコロナ禍前の2019年ごろの状況に戻つつある(図1)。

2025年に開催される大阪・関西万博には国内外から2,820万人(うち海外350万人)の来場が見込まれており、こうした成長機会を確実にとらえる必要がある。また、万博後の開業が検討されているIRでも年間2,000万人(うち海外600万人)の来場が見込まれており、万博後も航空需要は増えると考えられる。

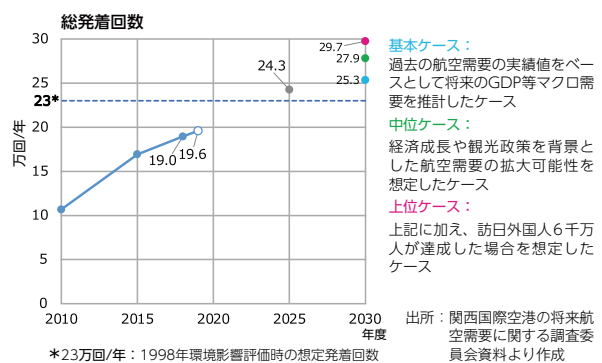
図1 関西3空港 直近の旅客数の推移



空港の機能強化の必要性

航空需要の拡大に備え、関西の3空港にも航空機処理能力の強化が求められている。関西国際空港の将来航空需要に関する調査委員会*1が2022年8月に公表した資料によると、関西国際空港(関西空港)の2025年度の年間発着回数予測は24.3万回(2018年度比1.279倍)となっている(図2)。ピーク時には1時間当たりの発着回数が60回に到達すると予測されており、現行のピーク時の1時間当たり45回を大きく上回る。

図2 2025年度需要予測・2030年度シミュレーション



また、神戸空港では、2019年に合意*2した80回/日の発着枠を2020年には使い切るなど、着実に需要が伸びている。このように今後見込まれるさらなる航空需要の拡大を見据え、関西空港、神戸空港では体制整備の必要性が高まっている。

第12回関西3空港懇談会における取りまとめ

こうした状況をふまえ、直近2回の関西3空港懇談会(座長：松本正義 関経連会長)では、空港の機能強化や活用の方向性が議論された。

2022年9月に開催した第12回懇談会では、関西空港・神戸空港の容量拡張目標、関西空港・伊丹空港を補完する空港としての神戸空港の活用の方向性などについて合意した。

第12回懇談会取りまとめのポイント

基本的考え方

- 2030年前後を目途に、3空港全体で年間50万回の容量確保をめざす

関西空港

- 成長目標として、2030年代前半を目途に、年間発着回数30万回の実現をめざす
- 2025年大阪・関西万博(以下、万博)に向けた万全の受け入れ体制を整えるとともに、上記目標の実現に向け、万博までに1時間当たりの航空機処理能力をおおむね60回に引き上げることをめざす

神戸空港

- 関西空港・伊丹空港を補完する空港として効果的に活用。その際、特に神戸市以西の新たな市場開拓等に取り組む
- 国内線は新たに整備が見込まれる国内線ターミナルの運用開始時を基本に、最大発着回数を現在の80回から120回/日に拡大
- 国際線は今後検討される国際線ターミナルの運用開始や関西空港の混雑化が予想される2030年前後を基本に国際定期便の運用を可能とする(最大発着回数40回/日)国際チャーター便は万博開催時からの運用を可能とする

今後の進め方など

- 上記の実現に向け、国に対し、現在の飛行経路の見直しについて検討するよう要請。国から要請への検討結果が示されたのちは、環境面の検証を行い、万博までに地元としての見解を取りまとめる

ブターミナルの整備やアクセス道路の拡充等を進めているとの報告があった。同空港に関しては引き続き関係者が連携して神戸市以西の需要開拓に取り組むことが共有された。



神戸空港サブターミナル建設予想 提供：神戸市

■ 関空成長支援プランの取りまとめ

今回の懇談会では、関西観光本部や自治体、経済界などが一体となって関西空港のさらなる成長に向けた支援を行うことやその取り組み内容を示した「関空成長支援プラン」を取りまとめた。観光需要やビジネス需要の喚起に向けた関西全体での取り組みや、空港近隣地域の魅力向上、関西圏を越えた広域連携施策などを盛り込み、2024年内の回復と成長軌道への復帰をめざすことを目標に掲げた。

■ 飛行経路の見直し案への対応

第12回懇談会で合意した関西空港の容量拡張や神戸空港の機能強化の実現に向け、国土交通省より、経路の新設や制限高度の変更などを含めた飛行経路の見直し案が提示された。

見直し案の妥当性や環境面への影響などについて検証するため、大阪府・兵庫県・和歌山県の共同で学識経験者による環境検証委員会が設置されることとなった。今後、同委員会のもと、客観的・科学的な見地から検証が行われる。

2025年の万博開催時に検証をふまえた見直し案を実現できるよう、関係者が緊密に連携・協力し、2024年に開催予定の懇談会において、見解の取りまとめをめざすことで一致した。

当会は今後も関西地域全体の発展に寄与すべく、3空港の機能強化に向けた取り組みを推進していく。

*1 事務局：関西エアポート、新関西国際空港

*2 2019年5月「第9回関西3空港懇談会」において発着回数を60回/日から80回/日に拡大することに合意。

(地域連携部 長谷川雅也)

第13回関西3空港懇談会における合意

今年6月25日には第13回懇談会を開催し、関西3空港における需要の回復状況や関西空港・神戸空港における機能強化の進捗を共有したほか、今後の成長に向けた取り組みなどについて議論を行った。

■ 関西3空港の需要の回復・各空港の取り組み

懇談会の冒頭、関西3空港の運用概況について、国内線の旅客数はコロナ禍前の90%程度まで、国際線については、同60%程度まで回復していることが関西エアポートの山谷佳之社長から報告された。また、関西空港においては第1ターミナルの大規模改修が進み、2023年冬には新しく国際線出発エリアなどがオープンすることも報告され、万博に向けた受け入れ体制の進捗が共有された。

神戸空港については久元喜造 神戸市長より、関西エアポートおよび神戸市において、万博に向けてサ